このコーナーでは、この地域に伝わる民話を紹介し、皆さんからの感想画を募集しています。紹介する民話は、子どもたちに、ふるさとの伝説や昔話を教え、遠い祖先の心や、郷里のぬくもりを少しでも感じてほしいと、松浦市教育委員会が平成4年に再編した「松浦の民話」という本から引用した話です。

松浦の民話⑰

丹後（たんご）の人柱

寛文10年（1670年）、今から約三百四十年前のことです。

今福あたりは、丹後守信貞（たんごのかみのぶさだ）という殿様が治められました。この殿様は、今福の人々の生活をもっと豊かにするために海岸を埋め立てて立派な田を作ろうと考えていました。村人はみな、この殿様の世にも珍しい考えに賛成し、ひじょうな意気込みで仕事に取りかかりました。しかし、村人の中には、「そんなことができるものか。」と、考える者もおりました。

いよいよ仕事が始まりました。おおぜいの村人たちは、朝はきらきら星が光っている時から、夕方は人の姿がみえなくなるまで働きました。仕事は一日一日とはかどって、いよいよ、しまいの潮止めをするというところまでできあがりました。

その夜のことです。海の波が高くおしよせて来ました。せっかくできあがった潮止めは、めちゃめちゃにこわされてしまいました。殿様はじめ村人たちは、がっかりして、言葉も出ませんでした。

けれども、また、元気を出して仕事を始めました。仕事はどんどんはかどりました。今にもできあがるという時になって、またもや大波に打ちこわされてしまったのです。何度こわされ、作り直したかわかりません。そのうちに、だれ言うとなく、口々に、「ていぼうができあがらないのは、海の神様の怒りにふれたのではないだろうか。神様の怒りを静めるためには、だれか人身御供に上がらねばならぬ。」と、言いふらすようになりました。

人身御供というのは、人が生きながら、土の中にうずまらなければならないのです。

この工事を監督している人は、田代近松（たしろちかまつ）という人でした。

ある日、田代さんは、みんなを集めて相談しました。

「みなさん、今日お集まりを願いましたのは、ほかでもありません。新田の堤防が、あと少しばかりというのに何度もこわされて、いまだにできあがりません。これはひょっとすると、海の神様がここを埋めたのをきらって、お怒りになっておられるのかもしれません。この上は、だれかが人柱になって、神様をおなぐさめするよりも他にないと思うのです。」

田代さんの声はふるえていました。みんなはうなだれたままで、「私が人柱に立ちましょう。」と申し出る者は、一人もありません。田代さんは、「だれでも、人柱になりたくない気持ちは分かります。でも、何とかして決めなければなりません・・・。」と言いながら、みんなの青ざめた顔を見回しました。

「もし、この中に、はいている袴に横ぶせをしている人があったら、その人を人柱にたってもらうようにしましょう。」

田代さんが言い終わると、人々はあわてて、自分のはかまのふせを調べ始めました。

自分のに横ぶせが当たってないことを確かめた人は、ほっとして顔を上げるのでした。

そしてとなりの人の方を見るのでした。とうとう横ぶせの当たっている袴は見当たりませんでした。

最後に、田代さんが、自分のはかまをみんなの前に出されました。

「あっ。」

皆はおどろいて顔を見合わせました。大きな横ぶせがしてあったのです。

いよいよ、田代さんが人柱に立たれる日が来ました。

まっ白な死装束を着た田代さんは、たくさんの村人や人夫たちに見守られながら、

「みなさん、さようなら。後はよろしく頼みます。」

と言って、ていぼうにうずめられました。おおぜいの人々は、みんなお念仏をとなえました。連れている犬の悲しそうな鳴き声に、人々は涙を誘われました。

人柱になった田代さんの死をむだにするなというみんなの思いが1つになって、工事はどんどん進み、最後の潮止め工事も、見事にできあがりました。

「田代さんは、自分から人柱になろうと初めから心に決めて、あのようなことを言い出したのだ。あの人は、そのような心のりっぱな人だった。」

だれ言うともなく、田代さんをしのんでこう言うのでした。

田代さんには、一人の娘がありました。ぼたんの花のように器量よしで評判でした。ところが、どうしたことか、父が人柱となって亡くなってからは、ふっつりとものを言わなくなりました。

それでもとなり村の庄屋の長男にお嫁に行くことになりました。めでたく祝言もすんで、その庄屋の家に行きましたが、なにぶんにも、ものを言いません。

「おしい嫁だが、これでは…」

というので、実家へ帰されることになりました。娘は、喜びも悲しみも忘れたように、顔色も変えませんでした。

娘を乗せたかごが、新しく埋め立てられた浜を通りました。するとその時、森の方からケンケンと鳴きながら、一羽のきじが飛び出してきました。かごのそばに付きそっていた花むこが、持っていた弓をひき、一矢できじを射落としました。

かごの中で様子を見ていた娘は、突然、

『口故に父は丹後の人柱

きじも鳴かずばうたれまじきに』

と、すらすら声を出して歌をよみました。

付きそって来た人たちは、「父の死を悲しんで、ものを言わずにいたのだ。」と分かりました。

花むこは喜んで、娘を庄屋の家に連れて帰り、幸せにくらしました。

今福町の人柱にある観音堂には、三十三体の観音像を刻んだ三重の石塔があります。これは、人柱に立たれた田代近松という人の霊を、なぐさめるために立てられた供養塔です。

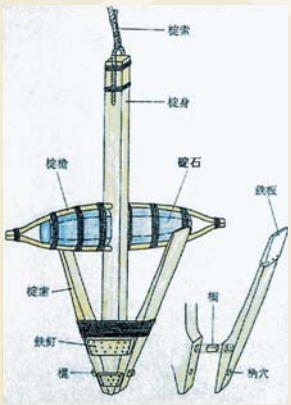
（今福町人柱）

わたしたちの郷土 ―67巻―

中世の松浦（33）鷹島海底遺跡

教育委員会では、鷹島海底遺跡から出土した「いかり」には、「碇」の文字を使っています。碇は碇の本体部分となる「碇身」、碇身の先端に取り付けられ海底に安定して突き刺さりやすくするための役割を果たす「碇歯」、碇身と碇歯を繋ぎ留める閂である「棍」と「楔」、碇の錘となる「碇石」、碇身の中央部に穿った上下2個の柄穴に通して「碇石」を固定する「碇檐」、さらに碇身の上端に取り付けられた昇降用の綱である「碇索」からなっています。碇石と碇索を除く部分は基本的に木材を加工して作られ、これらを固定するために鉄釘留めされる例もあります。碇石は石製で花崗岩、石英斑岩、凝灰質砂岩、石灰岩の石材を使用し、碇索は竹製の「竹索」が用いられています。

博多湾等から見つかっている長さ2から3メートルの角柱状の碇石は一石型碇石（博多湾型碇石）と称し、鷹島の碇石は長さが1メートル前後のものが多いことから半分に折れたものではなく一対で使用する分離型碇石であることが明らかにされました。また、もともと一石型碇石として作られた碇石を人為的に半折し分離型碇石として転用した碇石も確認されました。弘安の役が起こった1281年には、両種の碇石が同時に存在していることがここ鷹島海底遺跡で確認されました。



▲碇の略図

松浦の民話イラスト

読者の皆さんから寄せられたイラストの審査結果を以下の通りお知らせします。

先月の民話「**かっぱ石と喜左衛門**」のイラストに、5通の応募がありました。
ご応募ありがとうございました。

【最優秀賞】
谷川英樹さん（志佐・辻ノ尾、45）
「さすがのかっぱも喜左衛門さんのことが相当怖かったのでしょう。涙を流しながら許しを請う、すっかり反省しきったかっぱの様子が色鮮やかに描かれています。」（いの）

【優秀賞】
橋本　壮くん（志佐・住吉通、6）
「“村一番のごうけつ”喜左衛門さんの雰囲気がよく表現されています。逆さまになりながら必死に抵抗するかっぱの姿が、喜左衛門さんの強さをいっそう引き立てていますね。」（いの）

【優秀賞】橋本　快くん
（志佐・住吉通、4）
「かわいらしいカッパですが、いたずら好きのやんちゃな様子が紙面いっぱいに表現されていますね。色使いがとてもきれいです。」（いの）

■あなたの力作を募集！　―民話の感想画募集―

右の民話を読んで感じた情景をイラストにして、必要事項を記入の上、左記まで持参、郵送またはメールにて送付してください。応募いただいたイラストは審査をし、上位のものを次の市報で紹介します。

【応募資格】住所、年齢、性別など何も問いません。どなたでも応募できます。

【イラストの規格】はがきまたはA4サイズ以内の紙に絵の具やクレパスなどで書いた カラーのもの（色鉛筆の場合は濃く塗ってください）。

【必要事項】住所、氏名（ふりがな）、電話番号、年齢、職業（学校名）

※掲載する場合、ペンネームを希望する人は、ペンネームもご記入ください。

※はがきで応募される人は、必要事項を表の下部に記載してください。

なお、いただいた個人情報は民話コーナー以外には使用しません。

【応募締切】8月10日（水）必着

【応募・問合せ先】
〒859-4598　松浦市志佐町里免365番地
松浦市まちづくり推進課　秘書広報係
☎0956-72-1111　Eメール=hisyo@city.matsuura.lg.jp

※福島支所、鷹島支所、そのほかの各支所でも受け付けています。